

美川 自然 人 クラブ

平成19年秋の
増刊号

「美川 自然 人 クラブ」は、美川町の清流・湧水のシンボルであるトミヨ(はりんこ)を保護し、身近な自然と手取川河口流域の生態系を守り、住み良く快適で明るい地域を作るために活動するボランティア団体です。



H19.10.20発行

～活動報告～

毎年、夏に行われている「親子ふれあい自然観察会」ですが、この夏は特別の暑さの中さらにヒートアップ!!

これまでにないたくさんの参加者のみなさんと、北川にていろんな魚をとりました。

大人も子供もタモ網を真剣ににぎりしめ、何が入ったかワクワクドキドキ。「これなんて魚や〜?」と聞かれ、困っているお父さんもいたり、中には魚とりを忘れ、川原で泳ぎだすお子さんもいたり、みんな時を忘れて一生懸命遊べました。

魚とりの後は、いしかわ動物園から来てくださった山本せんせいに魚についていろんな話を聞きました。

「おたまじゃくしがたくさん採れたと思ってるようですが、これはナマズの子供です。」という言葉に、みんな大騒ぎ。小さいけどナマズを採ったんだから、ちょっとは自慢できるかな?

その後の、昼食会では「生き物ビンゴ」で、ゲームをしながら身近な生き物の名前を勉強しました。



撮影 2007. 8. 19日 (日)

初めて見たハヤブサの狩

Column

何を隠そう、いや隠すつもりはまったくないが、今から20年以上も前の冬のことやった。気が付いたら友人と手取川の河川敷にいたんや。「カモがいっぱいおるから見に行かんか」と、その友人の誘いについつい乗せられて、退屈していた私は半分興味に誘われたのか、外は吹雪いてるのに、暖かいコタツの中から引っ張り出されて、のこのことついて来た訳や。彼は犬の鳥好きで、渡り鳥シーズンになると日曜ごとにここに通っていました。

彼の秘密の観察小屋は河川敷の中の木立の中、いやヤブの中と言ったほうが正解かも知れない、そこへ向かおうと土手に下りた時、突然カモの群れが一斉に飛び立ちました。すると友人は「猛禽か?・・・ハヤブサや!」と言いました。私がビックリしてどこだと聞き返した時、カモの群れの上をスーッと上昇する一羽の鳥が見えました。ハヤブサは、突然急降下し、空中で1羽のカモを蹴り、雪原に引きずり落としました。地面に落ちたカモを押さえつけ、するどいくちバシでカモの首辺りをかみ切り、とうとう仕留めてしまったんや。ハヤブサと私たちとの距離はおおよそ80m。

友人の望遠鏡と双眼鏡で、お互い興奮しながら見ていると、いつの間にか、カラスとトンビが、集まってるやないけ。横取りに来た連中をツバサで叩いたり、するどいつめで威嚇しながらしばらくむさぼり食ってたんや。1時間位してハヤブサが去り、カラス達が去ると、雪上にカモの羽毛と真っ赤な血の跡が大きく残っていたんや。その光景は今でもはっきりと目に焼きついて消えることはないわ。

この出来事依頼、鳥に興味をわき、同じ猛禽類であるオオタカ、ノスリ、チョウゲンボウを含め、多くの鳥について知りたくてたまらなくなり、鳥類図鑑や実際の鳥をそれこそ仕事も食事も忘れるくらい見て回り多くの事を学びました。

冬はエサが雪で覆われてしまう為、鳥達にとって非常にきびしい季節です。多くのカモはシベリアの地が凍ってしまう前にその地を後にして、エサを求め、南へ向かいこの美川(手取川の河口)にもやってきます。すると、それをエサにする為、近くにいたハヤブサなどの猛禽類もやって来るわけです。

ちなみにこの話に登場した友人は、今でも変わらず鳥が大好きで、仕事以外の時間は野鳥の観察と撮影に膨大な時間を費やしているのです。新聞や冊子に取材掲載されながら、とうとう今年、美川で個展を開くことになりました。彼の名は浜上さんといいます。

その個展は、石川ルーツ交流館で12月10日までやっているそうなので、今の小劇場を思い浮かべながら、鳥達の写真をご覧になってみては如何でしょうか。

平成19年10月7日

美川 自然 人 クラブ 赤井 栄樹



✦

ハヤブサ: 最高速度300kmで飛び、その速さを生かした狩りをする。主なエサは鳥。大きさはカラスより少し大きい位。主に海岸付近に生息する。その名前はみんな知っているが、最近あまり見られない。日本全体で数百羽程度にまで減少したとされるが正確な数は判らない。